

違うんだよ、健司

夏休み明け、一人の転校生がやってきた。日焼けした精悍せいかんな感じである。名前は米村健司。

健司は、僕と耕平の所属している野球部へ入ってきた。三人とも家が近いこともあって、登下校が一緒に
なり、共に過ごす時間が長くなっていった。

付き合ってみると、健司は何事も積極的で、はっきりとものを言う。ある日の掃除の時、耕平がほうきをバットにして振っていたら、さっそく、健司が、

「早くしようや。」

と、注意する。耕平が大げさに肩をすくめたので、僕もまねて肩をすくめた。健司は、鋭い目つきで、ちらっと僕の方を見た。

ある日、三人でショッピングセンターに出掛けた時のこと。自転車置き場が
いっぱいだったが、耕平は、無理に押し込んだ。僕がどうしようかと迷っていると、耕平が、

「その辺に突っ込んでおけばいいんだよ。」

と、僕をせかしてさっさと行ってしまった。慌てて自転車を突っ込もうとすると、健司が言ってきた。

「おまえ、いつも耕平に合わせているけど、それでいいのか。」

「別に。それが普通じゃないか。」

「そうかなあ。そんなのが友達と言えるか。」

「おまえ、堅いんだよ。お互いに適当に合わせた付き合いが最高なんだよ。」



そうやって僕は、耕平の後を追った。

こんな調子で一年近くたった二年生の七月のことだった。ある日、健司が話し掛けてきた。

「おい、この頃耕平、変じゃないか。」

「そうだなあ。部活も休むし、授業中もよく居眠りをしているな。」

「何かあったのかな。」

と、健司は心配そうに言った。

「気になるんだったら、おまえが聞けばいいじゃないか。」

「聞いてみたよ。だけど、あいつ何にも言わないんだ。おまえ、幼なじみだろ。聞いてみてくれよ。」

僕も最近の耕平は少し変だと思っていたので、それとなく聞いてみた。

耕平は、一瞬、驚いたような顔をした。しかし、

「いや、ちょっとな。」

と言ったきりで、何も詳しいことは言おうとしない。もうそれ以上何も聞いてはいけないのだと、その時の僕は思っていた。

何も聞けないまま、夏休みに入ってしまった。そんな折、健司から思いがけない提案があった。

「おい。耕平を誘ってG町に行かないか。盆踊りがすごいんだぜ。」

「分かった。いいよ。」

翌日、健司と二人で耕平の家に向かった。

「いや、僕は……、無理だ。二人だけで行ってくれ。」

「なあ、そう言わずに一緒に行こうよ。」

と、押し問答をしていると、耕平のお母さんが、

「耕平、せっかく誘ってくれているんだから、一緒に行ってきたら。」

「でも、お母さんが……。」

「いいの、いいの。行ってきなさい。」

G町に着いた三人は、健司のばあちゃんに大歓迎された。夕方、町に出ると大勢の人が踊っている。最初は見ただけだったが、僕たちも盆踊りの輪の中に入り、結構夢中になった。

踊り疲れて帰ってくると、家の中からにぎやかな声がする。何ごとだろうかと思いつながら戸を開けると、二人の見知らぬおばあさんが台所に立っている。僕たちの驚いた様子を見たばあちゃんは、

「いやあ。お節介なばあさんたちなんだよ。」
と言う。

「何言ってるんだ。あんたの孫と友達に、鮎あゆを食べさせようと思って持って来たんだ。これは親切というもんだよ。」

と、三人のばあちゃんたちはいかにも楽しそうに言い合っている。

その夜、僕たちは、三人のばあちゃんと晩ご飯を一緒に食べた。おばあさんの一人は、健司のばあちゃんと幼なじみで、もう一人のおばあさんは結婚してG町に来たのだそうだ。そのおばあさんが、

「今ではみんな家族みたいなもんじゃ。隠し事の一つもできん。」
と、言って嬉うれしそうに笑っている。

食事の後、僕たちは庭に出た。星がきれいだった。川のせせらぎも聞こえる。頬に当たる風が心地よい。僕たち三人は妙に無口になった。今日の三人のばあちゃんたちを思い浮かべていると、「そんなの友達と言えるか。」という健司の言葉が、僕の中によみがえってきた。ふと耕平を見ると、沈んだ様子でうつむいている。

「耕平、どうしたんだ。」

と、僕が聞くと、耕平がボソツとつぶやいた。

「ばあちゃんたち、元気でいいなあ。」

「えっ。」

「実は、おばあちゃんが……。」

と、ぼつりぼつりと話し始めた。

「この頃変なんだ。……もの忘れがひどくなって、何度も同じことを言うようになったと思っていたら、この頃は家を出て行って帰って来れなくなるんだ。昼でも夜でもお構いなしでね。だから何か物音がすると、どこかに行ったんではないかと一晩中気がなくて……。」

「そうか、そうだったのか。」

「でも時々はいつもの普通のおばあちゃんなんだ。この間……僕の顔をよく見せておくれって……。憶えておきたいって……。言うんだよ。」

耕平の声は途切れた。黙って聞いていた健司が、

「耕平。ごめん。話しくいことだったのに、この間から言え、言えって。ごめん。俺はお節介だったんだ。」

「違うんだよ、健司。お節介なんかじゃないよ。なあ、そう思うだろう。」

と、耕平が僕の方を見た。

「そうだよ、お節介じゃないよ。健司が大事なことを教えてくれたと、僕は思っている。」

「俺、転校が多くて、早く友達になりたくて、ついお節介するんだよ。俺も友達ができて嬉しいよ。」

「耕平、僕に何かできることがあったら言ってくれよ。」

空を見上げると、真上に夏の大三角が明るく輝いていた。